瞥見、ミャンマー（ビルマ）の園芸事情

岩本　陽児
（和光大学　現代人間学部　iwamoto@wako.ac.jp）

Burmese Horticulture in 2013, A Brief Review

IWAMOTO Yohji

Abstract

The information for this fully illustrated article is based on our study tour to Yangon and Bagan of Myanmar in March 2013. We intend to report current situation of her gardening/horticulture in town and countryside. We witnessed that there are substantial signs of garden lovers, however, the gardening industry seems to be obviously under development. For example we encountered no garden centres or shops at all. We saw no labels or name plates attached to pot or hanging plants. Planting composts we observed were of all locally available materials and were not commercially produced, ie dusty soil for potting trees, coconuts fibres for hanging dendrobium and terracotta sherds for cymbidium. These situations will be drastically changed in the near future if the current government continues to pursuit the westernisation of the country.

はじめに

2013年3月9日から17日にかけて、和光大学の同僚、澁谷利雄教授（文化人類学）の企画したミャンマー・スタディ・ツアーに、ゼミ生・院生に混じって参加した。最大都市ヤンゴンと、中部の古都バガンを歴訪した道中、都市、農村双方の園芸事情を垣間見ることができたので、以下に報告し、若干の考察を加えたい。

3月のミャンマーは、前年の10月中旬に始まった乾季が終わり、かつ雨季の始まる5月中旬まで2か月続く暑季の始まりという季節の変わり目に当た

る。春先の日本と比べ日中の日差しの強さ、気温の高さは著しい。植物たちも生長を停止していて、いまだ休眠覚めやらずというものが少なくないように見えた。

Ⅰ　ヤンゴン（ラングーン）の旧市街

ミャンマーでまず出会ったのは、熱帯モンスーン気候区に属する大都会ヤンゴン、旧市街地（ダウンタウン）の路傍園芸とベランダ園芸である。以下、写真をご覧いただきたい。コンクリートブロックを鉢の下にすげて、樹木の鉢植えが数鉢、置かれている。ニチニチソウが丈高く伸びて花を咲かせている。中央の鉢は中国製らしい。鉢植えの用土は、大陸によく見る目の細かい粉状の土をそのまま使用している。（写真1）

写真1

同じ通り沿いにて。枯れ木がそのままになっていて手入れはよろしくないが、ここでもまとめて数鉢が置かれていた。早朝で、香り高いマツリカが花開いていた。（写真2）　この花を多数、白い糸でつづったものは、1500～2000チャット（邦貨150～200円）で路上で売られていた。仏陀への供物として仏像にかけてあるのを、パゴダでよく見かけた。

写真2

さて、通りに面した上階はと、見ると、アパートとなっている。写真からは分かりづらいかもしれないが、二階にはバンブーとドラセナ、三階には花キリンとアロエ・ベラの鉢植え。いずれも、大株となっている。（写真3）

写真3

丸っこいビルマ文字の看板が多い中で、漢字に思わず目が行った「勇気」商店の店頭にも、鉢植えの樹木や、サトイモ科？の観葉植物の植栽があった。(写真4)

写真4

II　ボージョーアウンサン・マーケットのラン店

この巨大な屋根付き市場界隈は、観光地として有名である。外の、通りに面した宝石店の店頭にひな壇を設けて、バンダ類の切り花を飾っていた。プラスチック製のスリット鉢に植えられたバンダ、カトレアもある。これらにはラベルも値札もついていない。隣国タイからもたらされたものかもしれない。(写真5)

写真5

同所には、バンダ類の切り花だけのスタンドも別に一軒あった。

III　ニャウンウー市場の焼き物店

これまでに都心で見た鉢植えには、意外に素朴な素焼き鉢が使用されていることが多かった。中部の古都バガンに足を延ばした折に、飛行場のあるニャウンウー村の市場の一角に焼き物の店を見かけた。売り物の中では飲料水用の素焼きつぼが目立ったが、ここで見た植木鉢は、手作り感あふれる素焼き、もしくは飴釉のかかった陶器で、日本に古くからあるような寸（号）別の規格化は行われていないようである。(写真6)

写真6

鉢底の水はけ穴は5つ開けられていて、意外に小さい。(写真7)

ちなみに、ここは交易の要衝とのことで市場規模も大きく、生活用品はたいがい揃うような印象だったが、鉢植えや園芸用品を扱っているところを見なかったのが興味深い。生花のスタンドはいくつかあり、エゾギクが多かった。

写真7

図1　ミャンマー略図

IV　バガン近郊の観光村ミン・ナン・トウにて

農村のシチュエーションで、鉢植えを見る機会があった。案内の少女は14歳という。彼女が専用の器具を使って、わら切りのデモンストレーションを見せてくれた時、傍らに置かれた鉢には、常緑の広葉樹、それに、おそらく観音竹の類が植えられていた。(写真8)

写真8

V　バガン、イラワジ河畔のレストランにて

ここもバガンの郊外。水が彼方まで干上がったイラワジの河畔である。

レストランは河に突き出した木製デッキの上にあるが、そこでデンドロビューム・ファレノプシスの釣り鉢を見た。四角い穴の多い専用のプラスチック鉢に、ヤシ殻繊維で植えつけられている。ここでもやはりラベルがなく、原種か改良品種かは判然としない。(写真9)

写真9

VI　バガン郊外の街道沿い

大木を背に、旅人の便宜に地元の篤志家がつくったというポッパ街道沿いの無料休憩所は、宿泊もできるようになっていた。水つぼが二十あまり並べてあるのは、経典の数に合わせたもので、こうした施設の建設が、仏教徒としての功徳を積むことになるという。スタンドの上の白っぽい陶器ポットが効果的に使われており、花キリン、クロトン、プルメリア、ドラセナが植えられていた。(写真10、11)

写真10

ヤシの幹を筒切りにして、ポット代わりに利用しているものもあった。黄色い星斑のアオキは、滞在中に見かけることが多かったが、英国植民地時代の名残りかもしれない。(写真12)

写真11

写真12

VII　小ポッパ山麓のレストラン裏庭

ポッパ山は、バガンの南東50キロほどのところにある。その山麓の、精霊神ナッ信仰の聖地という小ポッパ（タウン・カラッ）を訪ねた。参道下のレストランに昼食に立ち寄った際、裏庭に回ってみたところ、珍しいものがあった。ヤシ殻繊維のマットに、緑色をした大輪トキソウ（プレオネ）の球根を数百も、ピンで刺して止めてある。しかるべき時期に、店の玄関を飾るものであろうか。開花時には壮観と思われたが、よく見ると花の咲きそうにない小球も混じっていた。（写真13）

写真13

神様を祀ってある大木もあった。幹に釘を打ちつけて、ココヤシの殻に植えたデンドロビウム、バンダ、カトレアなどを針金でつるしていた。写真左手が、神様の祠の一部。開花中のものは、デンドロビウムの原種、ピエラルディーだろうか。ここでも、ラベルの類を見なかった。（写真14）

写真14

実は、中腹の村でバナナ苗などを鉢代わりのビニル袋に入れて売っている店を見かけたのだが、立ち寄ることができなかった。今後の楽しみとしたい。

以上、バガン近郊での見聞である。この地域は、内陸でサバンナ気候区に属するという。日中の暑さはひとしおだが、湿気が少なくからりとしていた。しかし植栽された園芸植物に関しては、管見のかぎり、ヤンゴン周辺との目立った違いはないように見受けられた。

VIII　国立民俗村

ミャンマー共和国は、文字と言語を異にする少数民族（races）がビルマ族以外に7民族という、多民族国家である。ここでは、8民族に特徴的な古民家を、

ヤンゴン東郊のパゴー川沿いの広大な敷地に移築している。ある民家の庭先で、写真13と同じくヤシ殻繊維のマットに止めた大輪トキソウ類の球根を、地面に立てた太い木柱にレイアウトしているものを見た。(写真15)

写真15

ある移築民家の庭先に、寒冷紗を張った木造白ペンキ塗りのラン舎があり（写真16)、内部の棚には素焼き鉢に植えた中･大型シンビジウム類が並べてあった。葉姿から、数種あるように見受けられたが、ここでもラベルがついていないため、原種か改良種かすらも不明。(写真17)

シンビジウムの培養土を確かめてみると、なんと鉢かけが使われていた。(写真18)

ラティス部分の内側では、デンドロビウムなどの着生ランが無造作に吊り下げられていた。ここでも、コンポストはヤシ殻繊維のようである。(写真19)

写真16

写真17

写真18

写真19

写真20

写真21

園内の立ち木に、デンドロビウムのおそらく原種が無造作にひもで結わえられ、着生栽培されているものが開花中だった。(写真20、21)

ここで見たラン類のいずれにも、ラベルはつけられていなかった。

園内の一角に、カラーリーフを使った花壇があった。何か、ビルマ文字をかたどっているものと想像したが、委細は不明。(写真22)

写真22

IX　再びヤンゴン市内

街路樹に、オオタニワタリのほか、少なくとも二種類のランが着生している。どういう花が咲くのか、想像もつかないが、まったくの放任状態である。(写真23)

写真23

僧院の中庭の昼下がり。袈裟が干してあり、ナンヨウスギ類などが、ホースの先にペットボトルをつないだお手製の散水機で灌水中。奥には花

キリン、アデニウムの鉢が並べてある。（写真24）

写真24

考察

1987年に、特に開発が遅れているとして国連LDC（後発開発途上国）認定を受けたビルマ（当時）は、社会主義政権および、1989年に国号をミャンマーと変更したその後の軍事政権のもとで、さまざまな葛藤を経験した。民主化運動に対する政府の人権抑圧が国際問題とされ、米国から制裁措置を受ける（1997）など、欧米諸国からは一定の距離を置かれていた。

その後、2011年に誕生したテイン・セイン政権のもとで和解が進められると、ミャンマーは欧米日とも関係を回復し、2012年には25年ぶりに世界銀行の融資を受けるなど、最近になって外資流入が著しく、日本でも日本企業関連の経済ニュースが次々と報じられるようになった。こうして今、ミャンマーは世界の資源供給国およびマーケットとして、激動の時代に突入しているかのようである。

ヤンゴン市中には、伝統的な市場とスーパーマーケットとならび、アメリカ発世界標準となった新設の大型ショッピングセンターがあった。私たちが目にした漆芸品などの細工物にはほとんどといってよいほど工人の銘が入っていなかったが、こうした無名の工人たちは、近代的自我と作品の個性を主張する作家たちにとって代わられて、早晩、姿を消すのではないかとも思われた。

さて、話を園芸文化に戻そう。日本の経験を顧みた時、私は鉢植え用土（コンポスト）三段階説を唱えることにしているのだが、それに従えば、ミャンマーはまだ第一の「どぶどろ・畑土」段階にあると見た。すなわち、手近な用土で植物を鉢上げして楽しむ段階である。コンポストの商品化、園芸書やメディアの情報化が進むと、「これでは通気が、水はけが」ということになり、袋詰め用土を購入して自分で調合する第二の「赤玉7腐葉土2川砂1」の段階となる。さらに世の中が忙しくなり、便利さが追求されると専用培養土が登場

する第三段階となる。種類に応じ、袋から必要なだけ鉢やコンテナに移して使う「○○の土」の段階である。

こうした中で、牧歌的な「どぶどろ・畑土」段階にあることは、ラベルのないことなど、品種名管理への関心の低さとも通底していると見えたのだが、いかがだろう。

もうひとつ、私にとって意外であり、不思議でもあったのは、小ポッパの麓の一軒を除き、いわゆる園芸店をさっぱり見なかったことである。市街地や郊外でずっと車窓に目を凝らしていてそうだったし、大型ショッピングセンターでも、園芸コーナーを見なかったのはどう理解したらよいのだろう。

かといって、ビルマ人が現に草花や樹木を愛でていることについては、上記した通りである。切り花については本稿ではそれほど触れなかったが、仏陀や精霊神への供花など、信仰の篤い国ならではの需要がある。ただしビルマでは、都会の一般庶民には墓がないという。墓参りもない。とすると、生花の需要は限られたものとなっていることが想像される。戦後日本の高級花卉園芸が、米軍のパーティ需要によって本格化したことを参照するなら、政治的・経済的な変化が、園芸の領域にも波及効果をもたらすのではないかと推察される。

現状では、日刊紙がようやく本年、2013年に認められたところであり、文化の普及・大衆化に影響の大きい雑誌の刊行、とくに園芸雑誌の刊行は、しばらく先のことになりそうである。

ここでは、ビルマの花卉や園芸は市場化がいまだ十分でないと、暫定的に結論づけておきたい。

おわりに

私たちが今回、見学したのは、冒頭にも示したように、乾季と暑季の季節の変わり目にあたった。違う季節に訪ねれば、違った知見が得られるだろう。今後の調査にまちたい。